

三、アナーキズムと自治意識

読者諸君。わたしは諸君に呼びかけよう。アナーキズムとは何か。それを本質的に訳すれば自治主義ということになる。アナキストにあつては社会的に、また個人的にそのあらゆるところに自治主義をもつて立つ。自治主義における社会観の一部は、前述の「アナーキズムと政治運動」の中にも、また後に言おうと思う農民運動、労働運動、婦人運動の中にも諸君は見出されることができると思う。ゆえにここでは、個人における自治意識の一端を説明する。

都合で例を引く。諸君は隅田龍子氏の論文の第二章の冒頭において、彼女が高群を揶揄しようとして、「高群氏の論文(?)は:::」と言っているのを見られたであろう。論文なる文字の下にことさらに(?)という符号を付しているところ、そこにはなかなか深重な意味がある。彼女はそれをもつて高群の論文は論文にあらずと嘲笑したつもりであるが、しかしこの嘲笑はアナキストには通用しない。アナキストには「言いたいことを言う」という一つの世界しかない。論文になっているとかいえないとかいってお互いに軽蔑し合っている世界のこと、アナキストの関知しないところである。

彼等の世界ではかくの如く個人の意識に至るまでが「偶像崇拜」的で、そこに「特権」の根柢を置くのである。読者諸君。わたしはこのまえ藤森成吉氏に与えて「勉強せよとの仰せ」というものを書いた。誰かが何かしゃべるとそれに酬いる言は「勉強してこい」と

いうことである。それ一言で彼は偉くなった気である。しかも彼自身が勉強しているか否かは、また自ら別個の問題である。つまりかかることは「勉強」という偶像を崇拜している世界での出来事である。隅田氏の論文意識もそれであって、かく種々の場合に現われてくる彼等の生活態度なり世界観なりは、明白にアナキストのそれと対立している。

読者諸君。彼等は「これは何々ではない」とか「何々になってはいない」とかいふことで辱しめ合い、陥れ合っている。そうした険しい世界にあっては、一般婦人とか、被支配大衆の大部分は、そのため萎縮して、自己表示の自由をすらも自ら放棄する。言いたいことも言わず、書きたいことも書かず、そして偉らい(?)学者たちの論文や演説を黙って聞き、そして読むのである。

例えば何々の大会とかいったような場所にしても「輝ける」婦人だの、男子だのが、偉い議論をする時、一般の大衆女子や男子は、言いたいことも言えずに縮こまっている。彼等は言いたいことが、ないわけではない。意思表示の形式が天下りのものであるときのみ、彼等は恐れて黙っているのである。そこでは彼等が少しでもしゃべることは、恐ろしく軽蔑されそうであり、また事実そうなのである。

わたしはそれについて、ストリンデルベルグの「赤い部屋」の中の一場面を思い出す。エリックゾンという一労働者が集会に出かけて行く。第一列にはもっとも優等な会員が着席した。彼等は彼等の優秀な議会的熟練をもって一切の御用的動議を強く支持した。今や同

盟罷工に関する厳肅なる議事が進行しつつある。

「わし、は発言を求めるノ　わしにしゃべらしてもらいたいノ」と、エリックゾンがいう。

「わしって誰です。君は君の名前をそんな風に綴るのですか」

「わしは綴るなんてことをしない。諸君、わしは議論するのだ」と彼は眼を輝かしながらいう。「そうだ、わしは議論するのだ。もしわしに演説をする能力(ちから)があったら、わしは同盟罷工者が正当だということを言ってやるうに。それが正当なのは、主人や支配人が御機嫌伺いや、それに似寄りの臭えことでおべっかするばかりで肥りやがるのに、労働者は自分の汗でその代価を払わなければならないからだ。が、わしたちは、お手前が何、故……」

「議長」

「騎兵大尉フォン・スポルンノ」

「お手前たちも知っているでしょう。租税評価委員会は税金が何がしの数字に達すると、すぐにそれを下げてしまうのだ。もしわしに演説をする力があつたら、もっとたくさんのことをいってやるうに。だが……」

「騎兵大尉フォン・スポルンノ」

「議長ならびに諸君。従来その尊敬すべき行為によって美名を博したこの会合において、

あらゆる議会的礼節を欠く輩が、一切の形式に対する無恥無遠慮な軽蔑によって、この尊敬すべき協会を辱めることを許さなければならぬのは、実に思いがけないことであります。諸君我輩を信じてほしい。我輩はかくのごとき人騒がせな芝居が我々の間に繰り返されないことを希望する。と言う時、我輩は一般の感情を表白しつつあることを信ずる。我輩は我々のリという——何となれば我輩もまた労働者であるから——そうして我輩はそのことをこの労働者協会の一員としていいいます」

「ひや、ひやノ」

「議長」

「医師ハーベルフェルドノ」

「いや、わしでした。エリックゾンです。わしはただこう言いたかったのです。パリのコミュニケーションをこしらえたのは労働者でなくて、官吏や法律家や、将校や、新聞記者どもだ。もしわしに演説をする能力があったら、その感情を誓言帳に書きあらわすことを、これ等の紳士に請求してやろうものを」

「予備委員の提議は採可されますか」

「賛成ノ 賛成ノ」

エリックゾンの演説は全然無視されていたのである。議事は着々と進行しつつある。

「貴君は面白いと思いますかね」と、エリックゾンは傍の人にきいた。「髪の毛を掻き

むしても足りないや。腐敗だ裏切りだとわしはこれ呼びまさあ」

エリックゾンのおしゃべりは、場外れたもので、いわゆる「論文」でなかったのである。彼はそうした形式に無知であり、ただ思っていることをそのまま真っ直ぐにしゃべるだけだが、それがこうした集会にあつては軽蔑されなければならないのである。無視されなければならないのである。

しかし、エリックゾンおよびその仲間が、ほんとうに自主的精神をもち、態度をもって、「ふん、論文ちゅうなア何ですかい、だがわしらはわしらの流儀でやりまさあ」という傾向が、一般的のものになってきたならば、その時こそすべてのそうした特権階級的の習慣なり形式なりは、影を潜めるに違いない。

読者諸君。彼等の「特権」意識こそは、我々の自治意識の前に、何ともろいものだろう。しかし我々がそれを悟らず、彼等の前にうつむいている間は、彼等は得々としゃばってくる。もっと悪いことは、彼等はそれを詐欺的に利用する。彼等は「この文章は論文になつていない」とか、それに似寄りのことをまず最初にする。我々はそれのために心理的の錯覚を起こす。我々の意識は半ば不透明になり、「正當に批判する」能力を失なう。彼等はつまり、論文の書けない手合いはわらうべきで、その一事で他の全部が推し量られるということを我々に暗示し、我々をまふと詐欺にかける。それと同じ筆法で、彼等は例えばどこかの書物——それが外国の書物であれば偶像価値が高いから一層いい——を一、二

頁もつてきて我々の前に出ず。すると我々は彼を偉い学者であるわいと思う。かくて彼は我々をやすやすと欺ます。こうした欺瞞的方法は、今では学校出たての娘および息子までそれを見習い始めた。

かくてわたしは言いたい。こうした彼等に対抗するため、そして、そいつらを克服するために徹底的に自主的であらねばならない。すなわち自治意識これである。

四、アナーキズムと真理

徹底的の自治主義は、知識に対していかなる態度をとるか。それを断呼として受け入れず、ただ自分という一つの穴ぐらの中に縮まっていることがその取る態度であるか。否、そうでない。自治主義に立つものこそ、最も科学的の態度をもって知識を受け入れる。それを偶像として奉ったり、あるいはまたそれを恐れて殻を固く被ったりというような感情的の態度をとらない。

さて今日は、知識洪水時代であるといわれる。もっともわたしらへのところは、その余波がほんの少しくるだけであっても、その少しの余波を見ても、それが何と多様な、無秩序なものであることか。これをいかに取捨選択するかということは、実に一つの重要な問題である。ここにアナーキズムの自治主義の精神が必要となる。おしつめて考えて行くならば、知識というものは難かしいものだ。我々はなかなか物識りのようでも、その実、何

一つ知ってはいない。第一、自分の顔がどんな顔かすら分らない。我々はそれを一度だっ
て見たことがない。鏡という不完全な物質を通じてわずかに間接に見ることができると
いうようになっていくであり、第二には、自分の住んでいる地べたというものの本質すら
が皆わからない。その底がどんなかも知らぬ。知識の洪水とか、科学の氾濫などといっ
ても、考えてみれば哀れなものである。

けれど、知識とか、科学とかいうものは、これらの未知の世界があつて、初めて生れて
くる。我々の先祖たちは「我とは何ぞや」ということを死ぬほど考えてきた。そしてその
問題はもちろんまだ続いている。「そんなことはすでに過ぎ去ったことだ」などというも
のがあるが、大きな間違いである。ただ、一時中止しているというに過ぎない。また我々
の住んでいる地べたの問題にしても、昔から今に至るまで、また将来にかけて「何ぞや？」
という問いが続いている。最近アメリカの地質学者のレジナルド・ダリーという博士は、
従来の「地球の中心は鎔けた火である」という説に対して「硝子中心説」なるものを発表
したそうである。それによると、地球の中心は摂氏五万度の熱度を有する液体硝子で、そ
の厚さは地球直径の過半に達し、その圧力（平方インチについて五千万ポンド）を基礎と
して我々の地べたが浮かんでいるわけだが、それが時折沈没したりするので、その時に地
震噴火というようなことが起こるといふのである。いまここで、こうしたことをわたし
が引っぱり出すわけは、こうした科学的の研究に対して我々の執るべき態度いかんというこ

とを言いたいからである。そこにはおのずから三つの態度が生ずる。絶対的に信奉する態度と、全然無視する態度および信奉も無視もしないで「ある一つの研究」であるとして受け入れる態度である。こう言ってみると、誰しも後者をもっとも妥当であるとするに違いない。すなわちこれ知識に対する自主的の態度である。この態度は自然科学を対象とする場合と、社会科学を対象とする場合とを問わず、常にもっとも妥当な態度である。

かかる態度に拠るわたしらは、必然にそれらの「ある一つの学問的研究」を真理であるとするよりは、その素材となつて多くの「事実」をより確実な真理であると考ええる。たとえて言えば、ある人の歴史観よりは歴史そのものである。真理というのは事実という意味である。我々はダリイ博士の硝子中心説よりは、「渇く時代、我々は水を欲する」という事実を真理として、すなわち事実としてより確実であると考ええる。アナキストはこの種の真理すなわち事実をもつてのみあらゆるその根拠とする。

五、アナキズムを農民運動に見る

広い意味における農民運動の初期のそれとも見られるものは、戦国時代における「農民軍」の運動であろう。それは「農民軍」とまでいってよいかどうかすら怪しまれるほど、歴史の表面には出ていないものであるが、例えば慶長年間、加藤清正の軍勢が小西行長軍を攻めた時のことが「肥後宇土軍記」にこう出ている。

「宇土近辺の土民ども俄に妻子眷属共を取集め逃散りたり。然る所に城より一里余り北に当り益城郡の内にて廻江村といふ所之れあり、——此所の本道筋に汐入の沼川に土橋有之、即ち廻江橋と云ふ。彼の村に久兵衛と申す百姓罷在、常に器量有之者にて行長も懇意にこれ在る為の由、之に依て久兵衛一人覚悟にて暫時の謀とは申しながら、——落残りたる土民共を三十人許り召連れ、漸く鉄砲五六挺許り取集め持出し、彼の土橋の中程を五六間許り、取崩し橋桁許りを残し、往來の通路を絶ち橋際に相支へたり。此時清藤村の次郎兵衛と申すもの、土民少々召連れ、加勢に來り相働き申候。——寄手方より物見武者を指出し相伺ひ候所、橋の土を切落し橋桁ばかり有之、外には其の近辺に道は無之、彼の入江筋は上下に長く汐引き候ても、沼故泥深く、早く渡る事叶ひ難く、寄手大勢たりと雖も、手段なくして俄に越す事を得ず寄手鉄砲百余挺を以て川を隔て終日打合しかば双方に手負討死夥多有之たり。寄手は夜に入り舟を求め出し、川下より残らず押渡りしかば、久兵衛小勢故場広の地にて重ねて防ぐ事を得ずして、久兵衛次郎兵衛は其夜宇土へ引取石の瀬口を固め居たる島正又助（小西の將）が手に走り加はりけるとなり」

これで見ると、小西行長への忠義のために戦ったように見えているが、その地方の伝説では、その頃百姓は戦争のために散々苦しめられていて、その結果、自衛軍を組織しなかなく強くあった。久兵衛（六弥太ともいう。改名したものならん）はそれらの首領株で、豪の者であったといい、徳望高く人格者であった。彼は心に武士の専横を憎むこと深く、

故にその挙に出たものといわれている。その沼川は浜戸川といい、今は彼を記念する「六弥太橋」という橋が架けられてある。

こうした「農民軍」は、その当時は方々に組織されていたとみえて、『農業全集』という書物にも「此時農人田を耕し稲麦を刈るにも必ず田の畔に兵員を立置て其事を営めりとなん」とある。

また、土佐物語に、

「仰々一領具足と申すは、僅の田地を領して常に守護へ勤仕もなく、役もなく、唯己が領地に引籠り、自ら耕し耘り、諸士の交もせざれば、礼儀もなく、作法もなく明暮武勇のみ事として田に出づるにも鎗の柄に革鞋兵糧を括り付け、田の畔に立置き、すはといへば鎌鍬を投捨て走り行き、鎧一領にて着替の領もなく、馬一匹にて乗替もなく、自身走り廻りければ、一領具足と名付けたなり。弓鉄砲太刀に調練して死生知らずの野武士なり。されば天子も將軍も知らばこそ」とあるのは、戦国時代における百姓の野武士化ともいふべきであろう。その時代にあつては、百姓は平和にその仕事を営むことができないから、丁度今日の支那における「大刀会」などという農民軍のように、平和の攪乱者に対して、武器を取って戦う用意が必要であつたのである。すると戦っているうちに、弓鉄砲太刀の技に熟達して野武士化してき、それがやがていわゆる土豪というものになる。わたしの父方の祖は、高木弾正と称して恐ろしい土豪で、その墓は「弾正塚」と呼ばれ、今もその塚の

14
の外

附近の草を「高群家」以外のものが刈ったりすれば、たちまち病気になるなどと恐れられている。母方の祖もそれに劣らぬ土豪で、「肥後文獻叢書」に、関の城主大津山河内守大津山姓は母の里の姓とあり、戦国時代にあつて豊臣氏の軍勢を向うに廻し、死物狂いを演じている。更に祖母（母方の）の祖先といへば、それらに輪をかけた物凄い土豪であつて、「五十二人衆の中にてさるものありと聞えたる菊池郡の隈部但馬親永（隈部姓は祖母の里の姓）：」など出てくる。肥後琵琶という琵琶の中で最も下品なものだと一般にいわれているが、（それはその弾手が、他の琵琶の弾手とは違って善くいへば放浪楽人、悪くいへば琵琶法師といつて盲目乞食であるからだろうし、曲も、歌も、共に卑俗である。それは、百姓を相手の音楽であるからである）その肥後琵琶の有する唯一の物語が「隈部但馬守」で、琵琶法師は今日でも、肥後国中の村から村をその物語を弾きながら歩きまわっている。それによると隈部但馬は極悪人ということになっている。南朝の忠臣菊池家の一門を酷い目に会わせたりしている。この物語を琵琶法師に命じて国中を弾き廻らせたのは豊臣氏の策であるといひ、今でいへば宣伝なのだが、そうしてみると、隈部但馬なる者は並大抵の暴れ者ではなかったらしい。山路愛山著『加藤清正』——民友社版の中にも、「肥後国は土豪割拠の形あり、：：然るに成政（佐々）の政治、思ひの外に手荒く、到着の後間もなく五十二人衆の中にてさるものありと聞へたる同国菊池郡の隈部但馬守親永が剃髪染衣の姿となつて新国主の入部を賀しけるを捕へて、きびしくいましめ、その従者の刀、

脇差をとり、幾重も柵を付廻はし置き、向後国主の申付に違ふまじき由の請状を出させて始めて帰郷を許せしのみならず、国中にさし出し（百姓一人一人ひかへし田畑の高いかほどと記し、さし出すことなり）を申付けなんどし、彼は手荒き処置に及びしかば、諸衆は出したれど、隈部は出さず、……隈部の子式部親房、山鹿の城に籠りて父を援けたり。これより国中の諸侍一揆して悉く成政に背き熊本を囲む。……関白此由を聞き浅野、福島、加藤嘉明、森勘八を打手として遣はし、清正もその例にありき」とある。もってその頃の土豪のかなり勢力の強くあったことが察しられる。祖母や母の語るところによると、この土豪群は、すべて百姓から出たものであるという語り伝えが残っていると言ひ、すなわち「農民軍」の変形したものであるというのである。

かくて戦国時代にあつては農民は「農民軍」を組織したり、他面にはまた、領主の苛斂誅求にあへば団体移住を企てたりして対抗したといわれる。

しかるに徳川時代になって、社会の秩序が立ち、それらの方法を取ることがすべて不可能となり、従つて組織的な一段とまさった搾取がされるようになると、農民の唯一の方法は百姓一揆より他になかった。

百姓一揆の最初の有名なものは、承応年間の佐倉騒動で、彼が神様として崇拜されていることは知られているとおりである。この事件は当時の農民に非常な感動を与え、それを仕組んだ芝居はいつでも大入満員を打ったといわれる。「近年是の事を江都劇場に致し、

14
丙

老職彼訴人を拷問する所において、数千の見物人ども宗五に扮したる俳優にさい銭を投与すること、舞台上に堆高く積ると聞く」（経済問答秘録）とあるを見ても窺われる。

この事件に前後し、または引き続いて、各所に一揆が起こったが、それらの犠牲者の記念碑等、今日でも各地に多く残っていて、それぞれ崇敬されている。これらの百姓一揆にめつたに裏切り者という者がなく、村の団結が今日に比べて強固で、犠牲者は多く名主とか庄屋であつたのは、今日の村長などとはよほど異なっていることがわかる。つまり彼等は官僚でなかった。当時の官僚は代官とかその他の役人であり、その役人が上からの派遣者であるに對し、名主や庄屋は下からの総代であつたからである。

もっとも内部では、名主や庄屋は今日と變りなく地主であつて、小作人と對立していたわけだし、そのことは、

「庄屋どんは肥らるばつてん（けれども）おいどん達あ（俺共は）瘠するたい」という歌のあるのを見ても分かる。

しかしこの関係はあくまで内部的のものとどまり、外部分にはお上、すなわち搾取者に對して、はつきりと一団になつて對立していたのである。

ところが今日では、搾取の形式が一段と組織的になり、複雑になってきている。村は分解し、単位を置き換えなくては一致ができぬようになってきた。すなわち村民のすべてが無所有の単位において、共有へ、共働への精神において甦えらねば、このうえ生き続ける

ことができないというところにきている。そのためには、それへ到達するための大小地主およびすべての土地所有者との経済的意識的闘争と、並びに今日の社会の支配者たる資本家階級およびその国家との闘争という、複雑な闘争形態が生じてきた。

我国に小作争議が起ったのは世界大戦直後で、大正六年頃を境として全国的に発生し、大正九年には争議件数四〇八、翌十年には一二五五件、十五年には二七一三件、昭和二年に入って一三四四件となり、以後は著しく減少している。大正九年頃から震災をはさんで十五年までが小作争議激増の時期で、昭和二年になってぐっと落ちてゐるのは、普選の与えられた年であり、その最初の府県会議員選挙があるなど、政治運動方面の影響があったためと、それに伴う弾圧もあり、翌三年二月に施行された総選挙では、非常な傷手を受けたように観察される。その総選挙の最中に、農民運動の最も盛んであるといわれる新潟地方に、政治運動否定の傾向が強く認められたのは興味あることであつた。つまり政治運動はそれらの農民運動を分裂せしめかつ疲労せしめるというのがその理由であつた。

杉山元治郎氏は昭和三年（総選挙の年）の農民運動界を回顧して、「昭和三年の農民運動は沈鬱の内にまさに幕を閉じんとしている。これを回顧して先ず一言に要約すれば、昭和三年は受難反動の時代であり、正に萎微退嬰の姿である。しかしそれは外面的のことであつて、農村改造の思想は減退したのではない。外部の圧迫にあつて内部へ内部へと進展し、組合は協同運動のごとき実質的な歩調を取り、あるいは政治運動より組合本来の経済

よるが

運動に立戻り、あるいは組合の合同戦線の統一を計るなどして健実味を現わしてきた」といい、萎微沈滞の原因としては、昭和二年の後半期からの地主どもの逆襲（立毛差押、立入禁止等盛んにその頃から行なわれた）と、総選挙をはさんでの官憲の弾圧（三・一五事件などもあり、香川農民組合全滅す）と、更に内部的には若い闘士等の農民と農民社会に対する認識の誤りおよび味方の陣営の分裂、分裂は自分同志の対立となり、内輪喧嘩に努力を消費した。また、支部の消極的サボタージュ、組合費不納等々を挙げていられる。そして本年において著しい農民運動の変化は、政治運動より本来の経済運動へと戻つたことだといひ、初め「小作料軽減運動の一步後には、立毛差押、立入禁止等が控えているから、政治行動なしには農民は解放されない、そのために無産政党を提唱した」が、その必然の結果として組合即政党となつたが、二回の府県会選挙、一回の総選挙をするに及んで、幹部は内部的、精神的に疲労を覚え、ある者は戦線から引いてしまった。そこで政党と組合との分離ということが考えられてきて、全国農民組合の新運動方針はそれを現わしているといつていられる。（全国農民組合は同年六月、日労党系の全農組合と先の労農党系の日農組合との合同せるもの、第二次の総選挙でどうなるか）

かくて更に、「農民運動が漸次政治運動を離れて、主力を経済行動に向けた一現象として、また小作料も今日は大分軽減され、農民を吸引する良い経済的スローガンのない時、協同組合運動は最も時宜に適したもので、各地で続々設立せられつつある。日向の大貫支

部、京都の草内支部の如く一町村で設立するものもあれば、大阪府連北河内出張所のよう
に一郡に渡るものもある。農民が地主に対して闘争を続けると共に、新しく協同組合運動
により商工資本家に対抗することは、二重搾取から逃れることである。資本主義の今日の
社会にはこれによる搾取はなかなか大で、この運動によると、自作農等の中間階級をも味
方に引き入れることが出来、或はそれは出来なくても、同情ある中立に立たしめることが
出来る」といつていられる。越えて昭和四年（今年）六月の『改造』では、「最近農民組
合の全国的進出として著しいものは、各種の政治行動であろう」といい、町村会議員の選
挙事情——若き都会的闘士を斥け、実際の堅実な村民の台頭せること、群馬県の強戸村
の如き村長、農会長、産業組合長、在郷軍人会等すべて小作人が占領しているが、今年の
選挙では山梨の塩崎村の如き、大阪の山田村の如き等々、第二の強戸を予想せしめている
と言ひ、更に「累年の著しき進出は協同組合の仕事で、強戸村の如き堂々たる成績を取
めている」その他京都の草内村、兵庫の伊保村、佐賀、宮崎、等々挙げて説明していられ
る。これらの運動にあつては、日常具の共同買入、使用、あるいは電力による共同作業を
も行なつてゐるとある。

最近の東朝にも、それらの著しく進出せる諸農村の各種事情を連載して、「村は甦へり
つつある」という感を強く抱かせるものがあつた。それによると、顕著な三つの傾向があ
る。一つは自治的の傾向で、中央部からの指導を必要としないばかりでなく妨げになると

いう傾向、二つは運動ブローカーが無視され、着実にして実際のな青年および土地農民の
手によつて運動が進められてゐる傾向、三つは建設の気運に向かい始めた傾向がこれであ
る。わたしの如くに村に生れ村で育つたものは、村会の腐敗、村民の無氣力、頹廢、それ
らの風をあまりに多く見せつけられてゐるから、最近のこうした傾向は確かに意を強うす
るに足ると考へてゐる。もちろん、それだからといつて、直ちに盛んな勢いでそれが一時
に燃え上がると思われぬし、永い期間の数多くの幻滅を経て、段々と積み重なつてい
くことになるのであらう。その第一歩を、やっと今、たしかに踏み出したという氣がする
だけである。

杉山氏の前後二回の報告およびその他の見聞によつてみて、農民運動が総合的になつ
てきた、すなわち地につてきたといふことが考えられる。農民運動は、単なる小作料輕
減運動のみでなく、土地問題へと徹底する意識において強まり、（これは運動が自治的にな
ればなるほど徹底してくる）更に他面においては、現在社会の支配階級たる資本家およ
びその国家を離縁するための各種の運動が総合的に行なわれて行かねばならない。一口に
いへば徹底せる自治運動これである。そして今や事実がそれを裏づけている。杉山氏もい
つてゐるやうに、農民の政治運動に対する関心は、堅固な自治主義を根柢としたうえでの
一つの方便的のものでしかない。立毛差押えとか、立入禁止等による地主の逆襲に対し、
政治運動の必要を感じて無産党加入となつたわけだが、——彼等は法廷戦に絶望して政治

戦を希求した。しかし、それも間尺に合わぬとなれば、今やまた法廷戦を試みるのである。かくのごとく彼等にとってはこれらのことは（政治運動も）すべて当面の一問題であり、

その深い根拠はまたおのずから他のところにある。曰く、自治。

彼等はこの自治のために、すべての戦いを戦いつつある。彼等は村会獲得に対しては強烈な熱意をもち、その選挙の結果は、全国を通じて驚くべきものがある。それに反して国会に対してはどうか。総員五万と称せられる全日本農民組合に支持せられた日本農民党に、僅か一人の当選者もなかったことは余りにも無残である。しかれば代議士になり損ねた幹部諸君にあっては、その結果五党合同とか分裂とかさらに社民党との合同を望むとかいう醜態を演じている。さらにまた、これも巨大な勢力を擁するといわれた日本農民組合の、しかも中心地であると歌われた香川県組合が、御大将大山郁夫氏をすら落選せしめたことは、そのすべてを単なる弾圧のためとのみで片づけらるべきことか。かく農民の自治的必然的動向は、内部的に決定せられているのである。農民におけるかかる自治的の態度は、それが自覚しない以前にあってすら、歴代支配者を悩ました癌であった。自覚しない以前にあっては、それは自守の態度をとっていた。農民は彼等を踏台として演ぜられるあらゆる階級闘争に無興味であった。王朝時代の貴族階級と武士階級によって演ぜられた階級闘争にも、次いでその武士階級と商工階級による封建時代の階級闘争にも、彼等はそのいずれが勝ったところで同じだといった調子だった。それには徳川氏も悩んだとみえて、

15の4

「農民は虫けら同然である。彼等は天下国家の事を弁へない。」

と怒ったというが、それはあたかもマルキスト諸君が、農民は小ブル意識が強いというのに似ている。その小ブル意識の何に基因するかを説明するには、いずれの時代の支配者も相当苦心し、それぞれの時代の思想に結びつけて理屈をこねている。また硯子録という書物には、「総じて百姓は士農（武士と農民）てふもののことわけ存じ知り申さず、かたつもりの返へすく浅ましう」とある。

武士は農民の善き組織者だ。農民は独りでは国家という政治形態を作り得ない。今や彼等にこのことを知らせてやらねばならぬ。農民はかたつむりみたいだから、ある場合それが非常に不都合をきたすというのである。

こういう奴等の考える組織形態（政権による集権形態）は、本来農民を内在的に決定している、ゆえに隙があればそれへ発展しようとするところの農民自身の組織形態（自治体の連合）とは常に矛盾衝突する。

しかれば、農民ならびに農業政策ということは歴代支配者の大なる悩みであったのである。農民は戦国時代にあつては自衛のための戦いを戦うか、他地を求めて逃げ去っていた。徳川時代にあつては窮鼠が猫を噛むというような意味における突発一揆で立ち向かった。が、そのいずれも極めて自主的のものであった。しからば、なにゆえしかく農民は自主的であるかという、彼は食えるからである。この「食える」という能力の持ち主であった

ことが、かえって農民を消極的にし、無自覚にし、無知にした。他の者は「食える」能力がないゆえに、武力に訴え組織に訴へ、獅子奮迅の限りをつくして「遊んで食う」「寄生して食う」方法を発明し、二六時中それを研究する。彼等の歴代の支配者が、すべて組織的の才智に長け、方法論の雄者であるのはそのためである。農民の疑いは素朴であった。彼等はいう。「俺ア自分で作り自分で食うになア、どこの奴か知らねえが、えれえ理屈をいってからに、俺のものを取って行くが、俺にやアそいつだけが呑み込めねえ」

かかる農民を統括することは骨の折れることである。徳川時代にあつては、かかる農民に対しては、ただ弾圧の一路があるのみという方法論がその初期にあつて盛んであつた。

「百姓は生かさず殺さず、搾取せよ」(家康)

「胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり」(本多正信献策)

「農は納なり。貢を納むるが第一の心得なり。」(土農工商心得草)

といった風のもので、うんと絞り取れ。文句をいわず遣つ付けろというのだったが、それからみると少し進んできたのだが、前に挙げた硯子録見解や、

「凡天下の人は皆王者の民なれば、租税を出し徭役に使はるるは民の道也」(経済録)

というようなものだ。明治時代に入り、そして今日とまでなってくると、いくら百姓の頭も進んできているので、種々な学問的の解釈が必要となる。そこで農民が持ち出すあらゆる素朴な疑問に対しては、物理学的、社会的、生物学的等々、とてつもないえれえ

理屈が答えとして与えられる。いわんや親愛な隅田女史よ！ 君の議論なんかはちょうど頃合ですよ。

しかしながら、支配者がかくも心を砕いても農民をしんから、抑えつけることはなかなかなことではない。徳川時代の農民政策は見るも無残なほど苦心惨憺の限りをつくしている。否、今日のプロレタリアの国ロシアですら、農民政策の悩みのいかに痛ましいものであることか。新聞は刻々かの国の農民一揆を伝えてくる。数千名を引っ捕え、数百名を銃殺に処したなどと聞えてくる。革命最初においてまず番狂わせを演じたのは、プロの農民どもであり、そこで一つ譲歩すると、またまたこの度は中農、そして地主というように。新々々々経済と、幾つあつても足りない。トロツキーはわが国の徳川氏に似て、何でも遣つ付ける主義の主張者だそうだが、そうもいかないとみえる。しかし農民に対する悩みは独りロシアとは限らない。ロシア当局は、農民に対するかかる悩みは農業形態のおくれにしていることからきているというが、その進歩しているアメリカでは、農業形態そのものすら疑いを起こし出した。最近アメリカ商業会議所の農業調査課で、大小農経営の利害得失を研究したところによれば、従来にあつては近代耕作法を採用することのみが、農業生産の不利益を除外する唯一の手段であると信ぜられているが、右の見解は必ずしも当を得ていないと一蹴している。第一に大規模農場は通常小農と比較し、成功の度合が優良でない。能率は両者互角である。大農の優る点は、経営が優秀であるとか機械の利用がよ

り能率的であるとかだが、不利益なのは優秀な能率のある労働力が得られないこと、事業の成功について労働者の興味が薄い、この不利な二点は小農に及びもつかぬことで、かつ労働の需要が季節的に変化すること、天候の条件が不定であることのために、機械の利用および労働の専門化が行なわれにくい。果して大農経営が小農経営を駆逐するかは怪しい。何となれば、今日試みられている大農経営は、農業全体としてみるとき比較的重要ならざる一部を占めているのみで、その将来の発展は不明である。要するに、大農経営は予期されたような発展をすることは疑問に属し、大農が小農を駆逐消滅せしめるだろうとの見解も現在のところ、すこしも立証されぬといっている。これ資本家の悩みというわけである。また国家政策の上からみると、農業に対する投下資本は不振で、貧農の離村は激烈を加えつつあるといわれ、さすがのアメリカの悩みもまたここにある。

文明国の悩みはこの農民の離村、農場の荒廃ということ、これには策の施しようがない。自然のままにして置いても、またロシアなどのように社会主義的政策を加味してみても同じことで、かえってそれは不結果で、モスクワは田舎から出て来た者でいっぱい、一五〇万の失業者がうろつきまわっていると帰朝者の話であるが、かくて世界のあらゆる支配者どもは、今や封建時代のそれのごとく、否、それよりもっと複雑な意味において、「農民ならびに農業政策」に苦心しだしてきた。

いかにせばよきや？ 農民は何を求めている？ 昔「農民には土地を！ 人民には平和

を！」というのがボルシェヴィキのスローガンであった。さて土地は与えられた。が、そのとき農民はいった。「なるほどね、土地はわっしのもんで、麦がお手前がたのもんか」

土地も！ 麦も！ すべてを！ 生産と消費の自由を！

その時こそ、農民はあらゆる意味における支配階級とその政府とを死滅せしめる。今やこれらのすべてを総合的に併せもって進展する農民運動！

すべての支配者が悩む「農民ならびに農業政策」問題は、農民自身をまたずしては解決できない。農民の飽くまでも自主的建設運動にのみ新しき未来は開ける。その究極の自由連合——それは一部落から始まって世界に及ぶ。従来の世界征服から始まって一部落に及ぶというやりかたは全然覆えされるのである。従来の世界征服の形式は最初においてはローマの武力征服の形となって現われ、その最後のドタンバにおいてアメリカ資本の世界征服の形をとってきた。欧州経済連盟の提唱は何を語るか？ かくてアメリカ資本は、イギリスであれロシアであれ、支那であれ日本であれ、そのすべてを席捲しつくすべく猛襲してくる。これに対抗し得るもの何？ 一切の意味における全然異なる組織形態産業形態および意識の（世界観の）台頭をまっしてはじめて可能である。すなわちこれアナーキズムである。

六、終りに一言

わたしはこのところで終りにするつもりはなかった。これからこそ重要な視野が展開されていかねばならなかった。労働運動にアナキズムを見、婦人運動にそれを探さねばならなかった。わたしはかなり多くの材料をそのためを集めた。しかし、今わたしは七十枚目を書いているから、雑誌の編集に不都合をきたすことが恐れられるので、ひとまず筆をおくことにする。

「歴史が決定する一定の段階などに全然無関心で、ただ自由のかけ声のみに気をとられる高群氏等：」などという意味をしきりにいつているが、どこからきた議論なのか見当がつかない。そういう漫罵や、根拠のない当て推量はもうお互いの論争ではない。それは古い幼稚な時代のやりかただ。

「花爛漫」とか「アナキストの自由は空を飛びかける鳥の夢だ」とか、そんなことをいつて面白いのかね。それで得意かね。「花爛漫」といったのが何でわるい。花は爛漫として美しいさ。また「空を飛ぶ鳥」にしても、我等は飛ぶことは大好きさ。「高群氏の思想は個人の自由の思想である」というが、もちろんだとも！それに何の不思議があるかね。

中島氏には、別に書かない。ただ君が軽卒にそして単純にアナキズムなるものを批評されることはどうかと思う。

終りに臨んで君たちの健康を祈るところであるが、漫罵とそれから挙げ足を取った気で、有頂天になることに以後なるべくしないがいいね。「機械が、プロレタリアをどうするか」とかと、鬼の首でもとっちゃったように騒いでいるなどは、愚にもつかない見当違いだからもう一度読み直してみるのだね。さようなら。